2003年度　神奈川大学　人文学研究所／国際シンポジウム
シンポジウム「アジアのポップカルチャーと日本」

趣意書

神奈川大学人文学研究所は1980年代以降，急激に変化する東アジア地域に対する理解を深めるべく，2001年2月には「21世紀，アジアの座標軸を求めて—東アジアの相互認識」を，そして，2002年10月には，「戦後補償と在日外国人の人権問題」をテーマに取り上げたシンポジウムをそれぞれ開催した。

アジア諸国をめぐる政治情勢の変化は中国の改革開放政策に始まり，台湾での陳水扁総統の当選，韓国での金大中・盧武鉉政府の誕生，東南アジア諸国連合 (ASEAN) の結束の強化など，様々な方面で確認することができる。政治情勢の変化以上に大きな変化は言うまでもなく，経済や産業部門で現れた。なかでも，中国の主要都市（北京，上海，広州など）は驚異的な経済成長を遂げ，今日では世界の「工場」としてもてはやされている。もちろん，アジア地域における通貨危機やバブル崩壊などで，アジア諸国の脆弱な経済体質が明らかになったことも事実であろう。

このような大きな変化は政治や経済の方面だけに限られたものではない。とくに，アジア諸国で活発になった人とモノの「移動」は，新たなポップカルチャーの形成を促した。都市を媒介とする大衆文化の拡散現象である。東京，上海，香港，ソウル，マニラの街角では，携帯を片手に，コンビニに通う若者の新たなポップカルチャーが共有されつつある。このようにアジア地域は，国際社会のなかで独自の文化圏を形成しつつある。

そこで，2003年度，神奈川大学人文学研究所は「アジアのポップカルチャーと日本」というテーマを取り上げ，アジア諸国のポップカルチャーを軸にアジア諸国と日本との関係について議論をすることにしたい。また，それぞれの国のポップカルチャーが形成，発展するなかで日本のポップカルチャーはどのような影響を与えているのだろうか，そしてアジア諸国のポップカルチャーはいま，どのように進化しているだろうか。学内・外から多くの方のご意見を賜りたい。

プログラム

会場：神奈川大学／セレストホール
日時：2003年11月2日
挨拶：伊坂青司（神奈川大学）
司会：寺沢正晴（神奈川大学）

報告者
王向華（香港大学・日本研究センター）
程郁（上海師範大学・助教授）
オスカー・カンポマーネス（Oscar Campomanes —ラサール大学出版会『American Studies Asia』編集者）
陳昌洙（韓国／世宗研究所・日本研究センター）

コメンテータ
市川孝一（文教大学）
朴順愛（韓国／湖南大学）

報告記録

香港大学の王向華氏の報告は「香港における日本の大衆文化の文化的影響」という題のもので，日本のポップミュージックとヤオハンを事例に日本文化がどのように香港に定着したのかを取り上げたものであった。王氏の分析によれば，日本の大衆文化のどの部分が選択・輸入・消費されるのかは，現地の地域社会，産業構造とも密接な関連をもつものである。例えば，1970年代，80年代の香港に日本の歌謡曲が流行したのは，その輸入が商業的な利益に繋がるものであったからに他ならない。経済分野においてヤオハンが香港に根を下ろしたと評価できるのであれば，その成功の最大の要因は土着化に成功したことによる。

上海師範大学の程郁氏の報告は，上海に在住する日本人の子供の1980年代以降の中国観の変化を紹介するものであった。とくに，程氏は上海日本人学校の児童のアンケート調査をもとに，①1987年～1989年，②1990年～1995年，③1996年～2003年の上海在住日本人学生の中国観の変化を詳細に追跡している。今まではなかなか活用できなかったアンケートという社会調査の手法を取り入れた点は多くの反響を呼んだ。討論の時間でも，中国，韓国，日本が共同でアンケート調査を行うことは可能かどうか多くの質問が寄せられた。程氏は改革開放が進んでいる上海では，社会学の各種統計やアンケート調査を実施することは可能であり，日本，韓国，中国の大学が共同のアンケート調査を実施することの意義についても言及した。

フィリピンからのオスカー・カンポマーネス氏の報告は，フィリピンのテレビ番組（GMAチャンネル7）で放映された日本の大衆アニメ番組「スラム・ダンク (SLAM DUNK)」を題材として，フィリピンにおけるアメリカと日本の大衆文化の表現形態を分析したものであった。氏は，従来のフィリピンのメディアや大衆市場のなかで長く根をおろし，独占的に消費されてきたアメリカの大衆文化に強力なライバルとして登場した日本の大衆文化がひき起こした影響を丁寧に説明した。氏は「スラム・ダンク」という日本的なものがフィリピンというアメリカナイズされた文化と異種混交される過程について今後も注目すべきであると指摘した。

韓国の陳昌洙氏の報告テーマは「韓国における日本大衆文化の開放」であった。氏は，日本文化の開放に対する韓国国内の賛否論争を紹介した後，文化開放の効果，日本文化開放の政治的な意味を順次，論じた。日本大衆文化の開放問題は日韓の貿易不均衡，過去の歴史の清算問題などと共に日韓関係の主要な政治争点であった。氏は日韓が自国の被害意識のみを強調することの問題点を指摘し，とくに歴史教科書問題については両国の政策的な対応が早急に必要であることを力説した。

市川孝一氏のコメントは戦後日本の外来大衆文化の受容に関するものであった。氏によれば，戦後の日本はアメリカの大衆文化を急速に受け入れ，その変化は戦前の「鬼畜米英」からアメリカ崇拝とまで称されるほど急激なものであった。ところが，ここで注目すべき点は，日本がもっている外来文化を「日本的なもの」にたくみに作り変える能力である。さらに，氏は日本人のアジア大衆文化の消費が徐々に拡大して行く現象を近年，日本でも放映された韓国の「冬のソナタ」という番組を取り上げて説明した。

朴順愛氏は最近の韓国の若者の間に急速に進んでいる日本の大衆文化の受容はアニメーションと漫画などを媒介するものであることを指摘した。日韓両国の間の歴史問題は両国が建設的に未来構築していくためには打破しなければならない。しかし，歴史問題が政治問題として利用されるような現状では，政治的な解決を急ぐよりは両国の若者の交流の活性化に期待をかけるべきであると言及した。

（文責　孫安石）